

自ら学び、互いに高め合う児童の育成 ～情報活用能力を生かした学びを通して～



船橋市立二宮小学校教諭 にしかわ こうたろう
西川 幸太郎

1 はじめに

本校は、令和3年度から船橋市の研究指定校として、ICTの効果的な活用方法の検証に取り組んでいる。研究指定1年目では、「すぐにでも・どの教科でも・誰でも」生かせる1人1台端末にすることを重点に研究を進めた。そこで研究指定2年目には、学習の基盤となる資質・能力である情報活用能力を生かした学びの在り方をテーマとして研究に取り組んだ。児童が身に付けた情報活用能力を生かして自ら課題に働きかけ、多様な他者と協働しながら学びを深めていくことは、本校の目指す児童の姿につながると考え、研究主題を設定した。

以下、研究主任として取り組んだ研究指定2年目の実践について紹介する。

2 研究の実際

研究指定2年目は、各学年及び特別支援学級での実践、遠隔教育・遠隔授業の推進を取組として挙げ、校内研究を推進した。

(1)各学年での授業実践

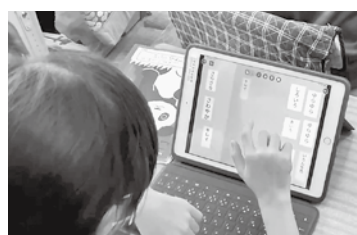
①1学年（国語科「おはなしどうぶつえんをひらこう」）



紹介カードを作る際、内容によってロイロノートのテキストを色分けしたことが効果的

だった。単元終了後にも、友達の紹介カードに興味を示し、読書の幅を広げる児童の姿が見られた。

②2学年（国語科「短い言葉で」）



情報を集める手段として「くま手チャート」の活用が効果的だった。テキス

トを自由に動かせる利点を生かし、語を並び替えたり、複製したりして何度も試行錯誤しながら詩作りに取り組んでいた。

③3学年（国語科「絵文字リーフレットを作ろう」）



整理・分析する場面の意見交流の際にロイロノートの色分けされたテキストを活用したことが

効果的だった。また、ロイロノートの資料箱に用意したヒントカードを児童が必要かどうかを判断しようとする姿が見られた。

④4学年（社会科「地しんからくらしを守る」）



学校に持ってくることができない防災グッズや設備は、画像として共有させた。具体的なイメージをもちながら考えさせることができ、

社会的な見方や考え方を働かせて必要性を判断しようとする姿につながった。

⑤5学年（理科「流れる水のはたらき」）



ロイロノートの提出箱機能を活用し、考察をクラウド上で共有できるようにした。同じよう

な気付きでも表現が異なる場合があり、児童同士に自然と対話が生まれ、より納得感のある考察へと練り上げることができた。

⑥6学年（社会科「武士の世の中へ」）



1人1台端末をモニターとして活用し、児童の考えを伝えさせる手立てが有効だった。発表

をまとめる場面では、よりよくするための視点を電子黒板で示したことで、どのグループも活動の目標を意識して学習に取り組むことができた。

(2)特別支援学級での授業実践

①自閉症・情緒障害特別支援学級

自立活動「人とよりよく付き合うためには」



ロイロノートでワークシートを配付し、自分の表情を可視化

させることができた。全体共有では、気付いたことを電子黒板上にかき込み、生き生きと意見を交流する姿が見られた。

②知的障害特別支援学級

算数科「買い物をしよう～お金の使い方～」

1人1台端末を活用し、どの児童も簡単に



買い物リストを作ることができた。写真付きのリストを作ったことで、買い物をする場面で

は、商品を探しやすくなり、意欲的な学習態度につながった。

(3)遠隔教育・遠隔授業の推進

①オンライン通級における吃音の指導



共有ノート機能を使って授業を進めた。思考ツールを活用し、各自の吃音について客観的

に振り返らせることができた。

②感染症による自宅待機者の学びの継続

全学年・学級においてオンライン授業を実施した。グループ学習にオンライン上で参加したり、全体共有で発表したり、専科授業にも参加できるようにしたりと通常の授業と変わらずに参加できるよう努めた。

3 おわりに

研究指定2年目は、ICTの利点を吟味し、より効果的な場面で活用できるようにすれば、本校の教育目標である「自ら学ぶ子」の育成につながると考え、実践を積み重ねたことが大きな成果だと感じている。

しかし、常に意識しなければいけないことが、ICT活用を目的化しないことである。本校では、1人1台端末を文房具と同様のツールにすることを目指している。

今後も児童の学びを広げ、深めるためのICT活用について、児童と職員が一体となった教育活動を推進していきたい。